

説教 『罪と救いのアンサンブル』 山本 護牧師
聖書 イザヤ書 45：6～7／マルコによる福音書 15：6～15

欧州やロシアのユダヤ人憎悪は千年以上も続いている。11世紀の十字軍派遣を期に迫害は激化し、西欧の迫害から逃れて東欧へ行けばそこでも排斥され、20世紀初頭ロシアではポグロム(大虐殺)が起こり、そしてナチスのホロコーストがあった。迫害していたのは皆キリスト教徒だ。「ユダヤ人はキリストの殺害者」という馬鹿げた観念を口実にして、彼の地のキリスト者はユダヤ人を逆恨みし続けた。

誰がイエスを処刑したのか。第一の責任は統治者であるローマにある。その後裔たる欧州人は、家にある聖書をちゃんと読んで自分の蒙昧を払ってほしい。むろん祭司長や群衆も無罪なわけではない。十字架刑は、ユダの裏切り(マルコ14:44~45)、ピラトの策謀(15:9~10)、祭司長らの扇動(15:11)、群衆の蒙昧(15:14~15)が折り重なって実行された。これら罪の複合は、神の「救いの筋書き」だったのか。

ある神学者は、こうした悪をも「神の御業の一要素」だと釈義した。そうかもしれない、おそらくそうだろう。罪なる人間を見捨てない神の御手は、驚くほど柔軟に人間と関わる。それゆえ「十字架という歪な救い方」になってしまった。すなわち、最初から救いに筋書きがあったわけではない。音楽のごとく、麻雀のごとく、メンバーの組み合わせ次第で質が異なるように、神と人間とのアンサンブルにおいて救いの状況が形成される。十字架とは、そのアンサンブルの結果ではないのか。

殺人者バラバが釈放され、愛の人イエスが十字架につけられる(15:15)場面を思い浮かべてほしい。何という不条理か。世の罪、世の不正、人間のおぞましさ、弱さ悲しさが目に見える姿で、そこに現れている。耳も澄ましてみよう。「十字架につけろ(15:13~14)」と興奮する群衆の怒号、扇動する祭司長らの驕慢な声(15:11)、尊大にふるまうピラトの声(15:9,12,14)、剣や棍棒を打ちつける音。イエスは沈黙し(15:4~5)これを一身に受けている。この人間の闇の力が、イエスを十字架へ押し出した(15:15)。

人間観察に長けた総督ピラト(15:10)、ではあるが「イエスがもはや何もお答えにならなかったのだから、ピラトは不思議に思った(15:5)」。様々な人間の裏表を見てきた彼にしても、イエスの沈黙は謎だった。迫力さえ感ずるこの沈黙。騒然とした場面の中で、イエスの静けさは奇妙に浮き立っている。ピラトは不思議さに僅かの躊躇を覚えたが、それを打ち消すように、手慣れた群衆操作をした(15:15)。

イエスの沈黙によって開かれる十字架とは何か。「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるもの(ガラテヤ2:20b)」。信仰とは、神の子と引き換えに、私の罪が十字架で担われている真実の受容。贖いに値する私になって赦されるのではない。価なしに贖われるゆえ、「生きているのはもはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる(2:20a)」のだ。イエスの沈黙には(マルコ15:4)、早くも十字架の愛と赦しの予感がある。

「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである(イザヤ45:7)」。闇や災いもまた御手による創造。しかしパターン化し、固定できるものではない。統べ給う存在のすべてが、十字架を軸にした、折々の、罪と救いのアンサンブルなのだから。



【おまけのひとこと】

順境の時は共に走り 逆境の時は傍らに坐っていた だが あの日のような沈黙ではない
むしろ 口出しがうるさいくらいの 聖霊の呼び声 聞こえているのだから 柔らかく応じていきたい